

還暦新人奮闘記

－ぐるぐるかたつむり－

社会福祉法人大三島育徳会 世田谷区立玉川福祉作業所

本明 伸

(一人ひとりに向きあった支援)

1. はじめに

私は昨年、35年間勤めたIT会社を辞めた。失業手当目当てで職業訓練校の介護サービス科に入校した。失業手当を貰いながらとりあえず半年間過ごそうという軽い気持ちであった。しかし様々な授業を受けるうちに、私でも人の役に立てる事を知り福祉の仕事に就きたいと気持ちが変わった。

そして職業訓練校を終了し、この4月から玉川福祉作業所に生活支援員として入職した。しかし、経験のない私は利用者の言動に戸惑い、何も対応する事ができなかった。この年齢で異業種に転職したことは間違いだったのではないかと、仕事を続けていけるのだろうか、と不安になった。そんな時に利用者のXさんの支援を通して、この仕事に対する喜びを初めて実感した、「ぐるぐるかたつむり」と題した支援について報告する。



2. 支援内容

Xさん（男性・二十代前半）は発達障害があるが明るい性格の持ち主である。昨年はコロナにより自主的な自宅待機が続き、十分に登所ができないまま今年度を迎え、私が担当となった。

そんなXさんの刺し子の作業で気になる点があった。集中して作業が出来るのだが、報告に来る度に刺し子の列を最初からカウントするため報告時間が長くなる事である。カウントせずに、刺し子に集中出来る支援を行えないかを、一人で考えてみたが良い案が浮かばなかった。そこで支援員全員で話し合い、「渦巻き模様の下絵を描き、その線上に刺し子を行う」という結論に達した。

翌日、渦巻き模様の下絵を描いた布を渡し、「この線の上を縫ってください。」と伝えた。拒否されるのではないかと心配したが、本人は「ぐるぐるかたつむり！」と大喜びし、最後まで縫い終わった。カウントする事がなくなったので、刺し子に集中する時間が長くなり作業効率が良くなった。

数日後、Xさんが自ら、同心円のオリジナルの下絵を描き縫い始めた。自主的に下絵を描く事だけでも驚きだが、色合いと緻密さに支援員全員が驚かされた。

その後、作品を並べた写真が作業所のインスタにアップされた。それをXさんの母が見てくれて、「皆様のご支援のお陰です」と連絡帳に記してくれたのを読んだ時、支援員としてのやりがいを感じた。利用者への支援が良い方向に向かい、そして家族の方にも感謝される。少しであるが自信も湧いてきた。



3. 学んだこと

今回の支援が成功した理由の一つは自分一人だけで考えず、支援員全体で考えた結果だと思われる。自分一人だけの考えでは限界があるが、支援員全体で考えること

